

# 峠を越えて 嫁入りした女



YamanakaTomotaku

山中與隆

Duo-Yamanka

峠を越えて  
嫁入りした女

---

山中與隆

## 目次

峠を越えて嫁入りした女 1

編者あとがき 65

# 峠を越えて嫁入りした女

作 山中與隆

芳は二十歳になつたばかりであつた。特別器量がいいというわけではなかつたが、家が代々しつかり者として知られているせいもあつて、二、三年前から縁談がしきりに持ちかけられていた。中には遠く

広島や、大竹から親戚や知り合いをたよつて申し込まれる縁談もあつた。しかし芳は、というより今は一家を切り盛りしている十五も歳の離れた兄太一がなかなか首を縦に振らず、どの縁談も成立しなかつた。太一と芳の間には男の兄弟が三人いたが、三人とも嫁を貰つてそれぞれ家庭を持っている。甥や姪が何人もおり、太一の三人の子供を合わせると、親戚一同が集まつたときなど大變な騒ぎであつた。そ

の中で芳だけが独り者で、そうしたときに太一の嫁と一緒にいたずら盛りの子供達の面倒を見るのだつた。

太一としては、この山間の砂谷村から一步も外に出たことのない世間知らずの芳に苦勞させたくないと言ふのが、たいていの縁談を断る理由であつた。だが太一の嫁は、多少は苦勞させるくらいの方がいい、あまり選り好みしていると婚期を逃して、貰い

手がなくなつてしまふと太一に言うのだが、太一はそうした意見を聞き入れなかつた。

そんなある年の春、峠を越した隣村の戸山から縁談が持ち込まれた。縁談の相手は農家の長男で、歳は三十になつていたが、働き者で結婚する暇もないくらいで、気がついたらこの年になつていたという男であつた。名は幸太郎といつた。

たまたま砂谷村の者で幸太郎の知り合いの男が、幸太郎を用事で訪ねたときに、いいかげんに嫁でも貰ったらというはなしになり、よければ砂谷村にしつかりしたところの娘を知っているから紹介しようかと言ったのがきっかけであつた。男は芳のこことを、おとなしいが真面目で、育ちもいい。特別に美人ではないが、色白で可愛いところがあるという風に話した。幸太郎は、そろそろ身を固めるときだと考



えていたので、一度話をつないでみてくれという事になった。

幸太郎は、芳の兄と似た境遇で、すでに父親を亡くして自分が一家の中心になって五人の弟や妹達の面倒を見ていた。二人の妹は嫁に行き、三人の弟のうち二人は広島で働いていた。もう家庭を持っている次男の家に三男は同居して、次男の始めた零細な町工場で働いていた。戸山の家にはまだ独り者の末

の弟がいて、幸太郎の農業を手伝っていた。

幸太郎は母親とその末の弟との三人暮らしであったが、父の残した田畑があり、幸太郎が働き者のおかげで家はきちんと維持されていた。盆暮れにはあちこちに散らばった兄弟が家族連れで集まってきた、毎年賑やかに休みを過ごすという点でも、太一の家と似ていた。

幸太郎は、それだけの切り盛りをしているので、

それなりの苦労もあるはずだが、それを表に出さず、いつも穏やかな笑顔を絶やさなかつた。彼がいまだに嫁を貰わないのは、そんな親代わりのような立場も、仕事の忙しさも関係していることは確かであつた。しかし幸太郎には、もうひとつ別の面があつた。それはほとんど誰にも気付かれていないことだが、複数の女性関係を持っていることであつた。相手は、どこそこの娘であつたり、だれそれの女房であつた

りだった。幸太郎のやり方は非常に用心深く、相手を選ぶにつけても、密会するにしても周到に行っていたため、誰にも気付かれずにきたのである。しかし、幸太郎自身そろそろそういう生活から抜け出したいと思っていた矢先の縁談であつた。

件の幸太郎の知り合いの男は、直接は太一を知らなかつたので、人を通じて幸太郎の話を持っていつ

た。太一もそういう人なら、会うだけでも会ってみようということになって、見合いが段取りされた。見合いは、双方とも若いものが中心の家らしく、形式にこだわらずに戸山と砂谷を結ぶ吉山峠の一軒茶屋で行われた。峠の道がたくさんの草花で覆われる緑の季節であつた。

この見合いで、芳本人は幸太郎のことを優しそうな人だと思つた程度で、特に強い印象は受けなかつ

た。しかし太一は、幸太郎が自分に似た境遇であることや、落ち着いて物静かな笑顔を絶やさないとこ  
ろがすっかり気に入ってしまった、ぜひ成立させた  
いと思うようになった。この男なら安心して妹を任  
せられると直感したのである。

いつも太一自身が気に入らなければ、芳の意向を  
確めることもせず縁談を断ると言う形で、特に意  
見を言うこともなくそれに従ってきた芳は、今度の

場合も、太一が気に入ったからと言う理由によつて嫁入りが決まった。話はとんとん拍子に進み、挙式は取り入れのすんだ秋ということになった。

芳は嫁入りの日、馬車で吉山峠を越えて幸太郎の家に入った。賑やかだが、たくさん見知らぬ人たちに会い、次々に幸太郎の親戚達が目の前に現れ挨拶していく。幸太郎の甥や姪たちは物珍しそうに芳

をじろじろ見て、元氣のいい子は芳の背中に抱きついて、その親に叱られたりした。新郎新婦にとつては、疲れるばかりの宴が夜遅くまで続いた。芳にとつて頼りの兄太一たちは、末席の方で幸太郎の親戚との挨拶や話に忙しく、芳は隣に新郎がいるのに孤独を味わっていた。

太一も離れた席からときどき芳の方に目をやった。氣のせいか太一には、酒で赤くした陽気な顔に囲ま



れた芳が、心細さに押しつぶされそうになっているように見えた。太一自身、芳をただひとり大海原に送り出したような寂しさに襲われていた。しかし、やさしい人たちに託すのだから心配は要らないのだと、自分を一生懸命納得させようとした。

祝言が終わると、まもなく山も谷も色づき始めた。この年は例年になく紅葉が美しかった。太一は北に

そびえる東郷山の方を見上げては、今年の紅葉がきれいなのはその山の向こう側で芳が幸せに暮らしている証拠だと思ふようにしていた。

芳の姑は優しく思いやりのある人で、よく力を合わせて家事をこなし、野良にも幸太郎を中心に四人で出て、傍目にも中睦まじい家族だった。

しかし、幸太郎と芳の二人だけの生活に関しては、

日に日に問題が大きくなつていくのだつた。それは、祝言から二ヶ月たつてもまだ夫婦の交わりが一度もないことであつた。幸太郎は、世間知らずの生娘を嫁にしたのだから多少のことは仕方がないと諦めていた。それで折をみては根気よく芳が自分に身も心も開くように説得した。幸太郎にとつては、密会の相手を何人か持つような生活をしてきたので、女の扱いに関しては自信があつた。密会の相手は、いず

れも自ら男を求めてくる女であるから、情事はお互いに激しく求め合うものであつた。それに比べて芳のうぶさは、幸太郎にとつてはかえつて新鮮であつた。少なくともしばらくの間はそうであつた。

だが芳の態度は日を追つてかたくなになり、幸太郎と二人きりになるとふさぎ込んでしまふことが多くなつてきた。姑は、直接は幸太郎からも芳からも相談を受けたわけではなかつたが、うすうす事情を

感づいていた。

ある日、姑は芳と二人だけになったときに、幸太郎とはうまくいつているのか、とやさしく話しかけた。芳は、姑がひどく言いにくそうに話し始めたので、何の話しかを悟った。だが芳はそのような話題を人と話すようなことができない性格ではなかった。別に困ったことは何も・・・と口籠もりながら答えた。姑はさらに、

「太一さんのお上さんから何か結婚してからのことを聞かなかったかい」

と遠まわしに訊ねた。姑は、うぶな娘を嫁に出すのだから、太一が嫁にそれなりのことを教えてやるように言ったのではないかと期待したのである。

「ええ、お母様にいろいろ教えてもらいながら、幸太郎さんを助けて……」

「いや、そういうことではなくて、なんて言ったら

いいか・・・」

姑も具体的に口に出すことはできず、結局ふたりとも相手が何を言いたいのかわかりながら、何も話すことができずに終わった。

姑は、ずっと以前から幸太郎の女遊びを感づいており、せつかく嫁を貰ってそれが治まったのに、芳と上手くいかなければ再発するに決まっていると心配でならなかったのである。

姑が心配したとおりに、幸太郎は三月のあいだ足が遠のいていた人妻と密会した。消耗し尽くすように激しく情を交わしたあと人妻が幸太郎に、

「新婚早々いったいどうしたの」

と言った。幸太郎は、この三月間の芳とのかを話して、何とかならないものかと知恵でも借りたというように話した。人妻はいかにも自分は先輩だからという風に、



「いくらうぶな娘でも二十歳にもなれば、結婚した男女が何をするかぐらい知っているものよ。誰からも教えられなくたってそういう風に体が自然に知るように出来ているのよ。人間ってね」

「あんたは特別だから、みんな自分と同じに考えても当てはまらないだろう」

幸太郎が茶々を入れた。

「黙って聞いてよ。真面目に相談に乗ってあげてる

んだから。私の勘では、芳さんていうのあなたの新妻さん、芳さんには忘れられない男がいるのよ」

「なんだ、わしと同じってことか」

「いや違うの。芳さんのはあんたの場合とは違って、実際にどうこうということではないと思うの。ただどうしても忘れられないような憧れている男の人って言うことじゃないかしら」

「じゃー、芳はわしと結婚したことを後悔して、ど

うしてもわしとの生活をこれから先続ける気になれないということか」

幸太郎は、話の相手が芳でもあるかのように語気を荒げた。

「私に怒らないでよ」

「すまない。だがそんな男つていったい誰なんだ」

「私にもそんなことはわからないわ。でも例えは、芳さんを人形のように可愛いがって大切に育てたと

「いうそのお兄さんていう人とか」

「まさか、だって芳の兄貴は太一って言うんだが、嫁さんがいてしかも芳も一緒に暮らしていたんだよ」

「だから、変な関係とか言うんじゃないって言ったでしょ。憧れが強すぎて、理屈ではわかっていても体が他の男を受け付けないということじゃないかしら。女はね、男と違って誰でもいいって言うわけに

はいかないの」

「男だつて誰でもいいなんてことないぞ」

「そうかしら。どこかの可愛い娘さんや、隣村の若後家さんはどうなのかしら」

幸太郎はそう言われて黙つたが、『お兄さんは……』  
という女の言葉にひっかかるものを感じた。そう言  
えば、あの太一が芳のことを言うときの言葉の調子  
や、芳に話しかけるときのようすが何となく特別な

雰囲気を持っていたように思えてきた。芳は、幸太郎が求めると、もう少し待ってくれという意味のこ  
とをいつも口にする。幸太郎は、芳は自分を嫌って  
いるわけではなさそうだが、心の中の太一を拭い去  
るまで待ってくれといっているのかもしれないと考  
えた。

幸太郎は、結婚前に通っていた女達のところであ  
たされない自分を慰めながら、家では芳が心を開ら

くの根氣よく待った。

芳は、幸太郎が女のところに通いだしたことを知らなかった。ただそれまでのように自分を求めなくなつたことには気付いていた。しかし相変わらず幸太郎は優しかつたので、すまないという気持ちで募つていた。それでもどうしてもその気になれなかつたのである。それだけでなく、会わなくなつた太一

の面影が日増しに強くなつて、会いたさで胸が張り裂けそうになつていたのである。

芳は太一とは血のつながりがなかつた。芳は遠い親戚の子で、三つのおきに太一の家にもらわれてきた。母親は芳を生んですぐ死んだ。芳の父親は自分が育てるといったが、まだ若いのだから太一の家で預かってもいいと言っているのだから、再婚して自



分の人生を再建するように、親戚のもの達に勧められてそうすることになった。芳は太一の家で本当の兄弟のように育てられた。両親が死んでからは太一が、親代わりになつて芳も含めて兄弟達を育て上げたことは初めにも書いたとおりである。

芳が十七のときであつた。太一は誰も入つていないと思つて風呂の戸を開けた瞬間、そこにいま上がつてきたばかりの糸纏わぬ芳と鉢合わせしたこと

があつた。太一は、芳がもらわれてきたころまだ夜尿があつて、母親にしばしばぬれた寝巻きを着替えさせてもらつて、母親に見たものである。しかし、いま成熟した女として、桜色の湯上りの肌から湯気を立ちのぼらせて、前を隠そうともせず立っている芳を目の前にして、太一は立ち尽くしてしまつた。やがて太一は我に帰つて、すまんと言つて戸を閉めたが、目に焼きついた芳の姿が長く消えな

った。その後、芳は太一に何か訊くようなときに、そつと肩が当たるようによりそつたり、太一と嫁の間に割って入るように席をとつたりするようになつたのを、太一は気付いていた。もとより太一にとつては可愛い妹であつたが、何となくそれだけでは言い尽くせない気持ちが生じていることに太一自身戸惑いを感じていた。そのことは太一よりもむしろ、太一の嫁にとって不愉快であつた。嫁から見ると、

と、一人前の年になってまだ兄にべたべたと甘える芳は気にさわる存在であつた。

だから、いよいよ嫁入りというとき、太一から結婚してからのことを少し教育しておいてくれと頼まれた嫁は芳に、

「芳ちゃんはまだもう二十歳だから、結婚したらだんなさんとのことなんか知っているわよね」と訊いたとき芳が、

「まー、少しは」

というと、もうそれだけで性教育は終わりにしてしまつた。芳が幸太郎の前で、拒みつづけたのは、太一の面影だけではなく、実際上の無知も大いに働いていたのである。

そんな調子で四か月も経つと、さすがの幸太郎もだんだん根気が尽きてきて、芳に対して持ちつづけ

てきた笑顔がなくなってきた。そのころは夜も別の部屋で寝るようになっていた。芳は、幸太郎の笑顔だけが救いであつたが、それがなくなるとますます孤立感が強まり、それに反比例して太一に会いたい気持ちが強まっていた。

そのころから芳にとつてもうひとつ、悩みが出来た。こともあるうちに、末の弟が幸太郎の留守に芳に言い寄つたのである。兄夫婦がしつくりいっついていな

いのをいいことに、おとなしい芳ならという気を起こしたのである。芳は、冗談と受け流したが、幸太郎の留守が増えると、弟はしつこくなってきた。芳にとってこの家は、ますます居ずらいところとなった。

その夜幸太郎は帰ってこなかった。夜遅くなつてから、一人で寝ている芳のところに弟が忍び込んで

きた。芳は必死で抵抗したが、弟も強引だった。そのうち物音と、声に気づいて姑が駆けつけて、ことは未然に収まった。姑は弟の頬を激しく平手打ちにして、朝になつたらこの家を出て行けと罵った。弟はふてくされて芳の部屋を出て行つたのだつた。

意を決した芳は寢床を抜け出し、台所の土間で野良着に着替えて、そつと家を抜け出した。外は東の空がかすかに白んでいるだけでまだ夜の暗さであつ



た。二月の明け方は寒い。何も悪くない幸太郎にも、常に優しくいたわってくれている姑にも、本当にすまないと思ひながらも、もう一日もここには居れないと思ひつめての家出であつた。

馬車で嫁入りした吉山峠の道を行けば半日で太一のいる砂谷村の実家に戻れる。しかしそれでは、夜が明けたらすぐに誰かに見つかつてしまう。芳は遠回りだが、砂谷村に行くのには誰も使わない不明峠

（あけずとうげ）を越えて、麦谷をまわっていけば見つからないだろうと思ひ、その道をとることにした。

間もなく明るくなり、青空が広がる良い天気であった。峠に向かつて急ぐ芳に後ろから朝日が当たり、額に汗が流れた。幸い誰にも会わずに歩きつづけた。砂谷村がどの道を通つてもそれほど遠くないことは分かつていたので、必死で歩けばすぐ着けるような

気がして、何の準備もなく飛び出してきた。姑たちに気付かれないように出てくることだけで精一杯であつた。

日がだいぶ高く上がったころには、空腹を感じるようになった。昼が近づくにしたがつて、かならず誰かに出会ってしまったらと思ひ、芳は気が気でなかつた。不明峠を越したあたりで、芳は山を越すことにして、踏み均された山道に入つていった。芳は砂谷

村の側からいつも東郷山を見ていた。嫁入りが決ま  
つてからは、実際には多少方角が違ふのだが、芳は  
あの山の向こう側に住むことになるのだと考えてい  
た。だから芳は東郷山ひとつ越えればすぐ砂谷村に  
降りていけるような気がした。しかし芳が入り込ん  
だ山道は、東郷山に行き着くまでに幾つかの峰を越  
さなくてはならない複雑な山道であつた。芳は漠然  
とそこには東郷山だけが一つそびえているように考

えていたが、実際には戸山村側からは似たような高さの峰々が重なっていて、戸山側から東郷山の頂上は見えない。芳はそんなことを考える余裕もなく、いまにも誰かが追ってきそうな、見えない影に怯えて、後ろも振り返らずに山道に分け入った。とにかく西に向かって歩けば必ず砂谷村に行き着くと信じて歩いた。

大まかに言えばそれは間違っていないなかつたのだが、

実際に山道を歩くと、そう簡単ではなかった。山仕事の者が通った道らしき踏み付け跡を頼って芳は歩いた。目の前にある峰の頂上に立てば、その先の眼下に懐かしい砂谷村が見下ろせると信じながら。だから目の前の峰までがんばりさえすればと足を速めた。

山道に入り込んで三時間も歩いただろうか、最初の尾根に立って木々の間から見ると、その先にはさ

らにいくつもの峰があつた。芳は少しがっかりしたが、その峰のどれかが東郷山だろうと思つた。だが、どれなのか全く見当がつかない。芳は、とにかくひたすら西に向かおうと考へた。

しかし山道は、右に下るか、左に登るかの選択をしなければならぬところに来た。芳は、登るほうを選んだ。芳は方角を確かめようと空を見上げて、太陽の位置を確かめた。朝のうち青空だったのに、

いつの間にか空全体に雲が広がって、太陽は隠れていたが、大体どの変に太陽があるかはわかった。風は冷たく、立っていると汗に濡れた体がぞくぞくするほど寒い。

芳は気を取り直して歩き始めた。初めは山仕事の人々が踏み均した道を歩いていたが、だんだんはつきりしなくなり、しばらく枯れた熊笹の覆いかぶさった道をかき分けながら進んだ。とげのある枝で擦り



傷だらけになった。さらに一時間近く歩いて、ある峰の頂上に来た。その先に見えたのは砂谷村ではなく、はるか下の方に戸山村の集落が見えた。芳にも見覚えのある寺の屋根が見分けられたのだ。そこから尾根伝いに西に山道が伸びている。芳は少し方向が定まったような気がした。

戸山村を左手に見ながら西に進めば砂谷村に行ける。しかし、道はにわかには険しくなった。登りは急

になり、芳は四つん這いになつて岩を攀じ登つた。体には汗が出ているのに、手は凍るように冷たい。岩や木につかまる手がかじかんだままだ。芳がようやくなだらかな尾根筋に出たとき、厚くなつた雲の上で、太陽は明らかに西に傾き始めて、あたりの風景からだんだん色がなくなつてきていた。尾根筋から左に見える山や、谷に数軒見える家などはまだ戸山村の風景のようだと思つた。

進む方向には、壁のように大木に覆われた峰が立ちふさがっている。西を背にしたその峰は、暗く覆い被さるようであつた。芳はそれが東郷山であつてほしいと願つた。芳は、今朝早く幸太郎の家を抜け出してから飲まず食わずで七時間以上歩いてきた。芳は空腹と、疲労を強く感じ始めていた。

そのころ、幸太郎の家では芳がいなくなっている

というので騒ぎになっていた。幸太郎は、すぐに農作業に使う馬車を仕立てて、砂谷村の太一の家に向かった。吉山峠を越して二時間足らずで、太一の家についた。ただならぬ様子で突然やってきた幸太郎の姿を見て、太一はすぐに芳に何かあったと直感した。

幸太郎はいきなり、芳が戻っていないかと太一に訊いた。一体何があったのかと訊く太一に幸太郎は、

今朝目を覚ますと芳の姿がなく、はじめは畑かどこかにいるのだらうと思つたが、朝飯の時間になつても用意もしてなければ、帰つてもこないので、慌てて方々を探しているのだと説明した。幸太郎は、自分が昨夜家に帰らなかつたことは言わなかつた。また弟の事件は母親に聞いて知っていたが、もちろんそれも太一には話さなかつた。

太一は、何か手がかりになるようなことはないか

と幸太郎を追及した。幸太郎の頭には、昨夜のこと以外にも、結婚以来の芳とのこと、最近のふさぎこんでしまった芳の様子、それに対する自分の態度、そしてあの人妻が寝物語に言った憧れの男のこと、つまり太一ではないかと幸太郎が思っている男のこととが駆け巡った。だから真っ先にここに来たのであった。しかし、思い当たることは何もない。突然いなくなつたのだとだけ言うのであつた。

太一は、幸太郎と芳の関係がどうなっていたのか全く知らなかったもので、事故で川に落ちたとか、そういうところは調べたのかと詰め寄った。幸太郎は、芳の姿が無くなったと知った瞬間、太一のところへ逃げ帰ったに違いないと思ひ込んでいたので、事故の可能性を考えていなかった。太一は幸太郎が事故の可能性を強く否定したのを不思議に思った。

幸太郎は、複雑な事情は言わずに、最近芳は実家

に里帰りしたがっていたから、我慢しきれなくなつて飛び出したのかもしれない。自分がこのところ忙しくて、一段落したらと曖昧な返事をしていたのがいけなかつたのかも知れないと言つた。そして、いま自分は吉山峠を通つてきたが、途中追いつきもせず、ここにも返つていないところを見ると、別の道を通つて来るつもりかもしれないので、これから和田村、麦谷村、不明峠の道を通つて見る。何かわか



つたらずぐ知らせてくれと頼んで幸太郎は帰つていった。

太一は、すぐ出かける支度をして、嫁にはもし芳が帰つてきたら何も責めたりしないで家に入れるように言い残して、歩いて出かけた。吉山峠経由で戸山村まで行くつもりであつた。途中七曲がりや、吉山峠の道ではいちいち谷川に降りて、そこに芳の姿がないか確かめた。午後遅くなつて太一は幸太郎

の家についた。幸太郎はもう家に着いていたが、不明峠經由でも芳には出会わなかつたという。午後はさらに雲が厚くなり、冷たい風に吹き飛ばされるような小雨がときどきぱらつた。今日は一旦引き上げて、夜までにどちらの家にも戻らなかつたら、明日山を探そうということにして太一は、幸太郎が通つてきた不明峠越えの険しい道を砂谷村まで帰つていった。太一は暗くなつてから冷たい雨の中を疲れ

きつて砂谷の家に帰り着いた。芳は帰っていなかつた。幸太郎の所からも何の連絡もないと言う。

芳は、実家の隣の北谷や、さらに一時間ばかり北に行つた下伏といつた集落から東郷山に登る道があることは子供のころから聞き知っていた。実際に登つたことのない芳は、向こう側から登れば絵本にある山のように単純にこちら側に降りて来られるよう

に思っていた。しかし、実際の山は東郷山のようにさして複雑な山塊を形成していない里山でも、幾つかの大小のピークを連ねている。山に慣れた者なら、芳の入り込んだコースを歩いても数時間で山を越えることが出来たろうが、芳の場合はそうはいかなかつた。

昼前から広がり始めた雲は、時間とともに厚さを増し午後には時雨となり、夕方からは白いものが混

じり始めた。冬の山は暮れるのが早い。たちまち芳のたどっていた踏み分け道も見えなくなつた。芳は、ずいぶん前からふくらはぎに引きつりを起こしては、休んでもみほぐし、多少楽になるとまた歩くという繰り返りで、歩みは遅々としていた。暗くなつてくると恐怖感に襲われ始めていた。それに寒さと空腹と疲労で意識もだんだん朦朧としてきた。

もう目を凝らしても足元が見えなくなつていた。

ただ目の前を白いものが舞い落ちるのがぼんやりと見えるだけである。

どれくらい経つたのだろうか、風が木に積もつた雪を振り落とした音に起こされて目をあけた。芳は大きな木の幹に寄りかかるようにして坐っていた。芳は、自分の手も見えないような真つ暗な山道で、ぶつかるように掴まった木の幹の下に座り込んだこ

とを思い出した。今見ると、そのときとは全く違つた世界のようになつて、あたりは白っぽく明るかつた。雲が切れて、澄み切つた丸い月が出ていて、薄っすらと積もつた雪があたりを薄明るくしている。芳の膝や肩に乗っている雪も月明かりを受けて光っている。芳は、不思議と寒さも空腹も感じなかつた。ただ間もなく太一がここにやつてくるような気がして、再び意識が朦朧としてきて目をつぶつた。

翌早朝から、砂谷、戸山それぞれの村の駐在を中心にして捜索隊が組まれて、山狩りが始まった。昨夜太一が帰った後、戸山村の駐在にひとつの情報がもたらされていた。朝早く不明峠の近くで山に入つていく人の姿をちらつと見かけた。焚き木拾いにしでは早いと思つたが、男か女かも確かめられないうちに見えなくなつた、という通りがかりの者の情報であつた。



駐在は、幸太郎の届出とこの情報を結び付けた。

その夜遅くまで、砂谷村と戸山村の間で関係者達が行き来し、人集めや搜索の段取りが話し合われたのである。搜索は戸山側、砂谷側の両方からすることになり、戸山側は情報のあつた不明峠付近の山道から、砂谷側は伏谷の下伏の集落から始められた。

太一は下伏から登る三人組みの一人として加わつた。この組や、幸太郎の加わつた組では口にする者

はなかつたが、捜索隊の者も捜索隊を見送る者も、芳が本当に山に迷い込んだのだとしたら、昨夜の雪で凍死したのではないかと感じているのだつた。

芳は、あっけなく太一たちの組に発見された。芳は、大きなツガの木の根元で、蒼白の顔を半分雪にうずめるようにして横たわっていた。太一が駆け寄って抱き起こしたが、すでに息絶えていた。太一た

ちが下伏から僅か二時間登った東郷山の頂上近くであつた。

(完)

\*この物語はすべてフィクションであり、登場する人物その他はすべて架空のものです。

## 編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな  
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同  
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣  
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。  
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中  
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう  
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの  
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))  
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前について

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。



## 著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も  
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた  
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴  
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの  
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら  
かの形で音楽が絡んだものにしたいたいと考えています。  
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

## 今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

## 既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

## 既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

## 三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

## 阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる轉身

ある男の臨終

野の寂しさ

## 四重奏



親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットのあゝ風景

「オセロ」の手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

## 紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

## 短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

## 12 カルテット

## 最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

---

## 峠を越えて嫁入りした女

---

2022年8月10日初版発行

著者：山中興隆

編集：山中伶子

表紙素材元：

[www.photo-ac.com](http://www.photo-ac.com)

タイトル：夜に降る雪

作者：つむたまさん

写真のID：23230627

[www.ac-illust.com](http://www.ac-illust.com)

タイトル：白無垢

作者：好さん

イラストのID：455779

©Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>

---